

石 仏 散 歩

すとーん・さーくる

No.103

発行 新潟県石仏の会(代表 星野 紀子)

2018年12月20日 発行

事務局 T945-0837 柏崎市三島町16-2 渡邊三四一 電話0257-22-1941

ホームページ <http://niigata-sekibutu.voxx.jp>

石 仏 散 歩

韓国 の 石 積み 信 仰 と チ ャ ン ス ン

柏崎市 渡 邊 三四一

石をめぐる素朴な信仰形態に「石積み」がある。日本では賽の河原のそれが典型で、この世での石積みがあの世の死者の回向になると信じられた。本県では佐渡の願や柄尾の賽の河原が知られる。五来重によれば、五輪塔や層塔などの石塔は、この石積みが佛教的に様式化されたものだという。

このたびの「韓国石仏の旅」でも、この石積み信仰をあちこちで見ることができた。慶州・仏国寺の極楽殿裏では、若いカップルが賽の河原とおぼしき石庭で小石を積む姿を目にした。脇の石壙の上にも石積みが累々と続いていた。南山山麓の三尊石仏見学の折にも、移設された寺院の礎石に積まれた小石群を見た。日本で見かける神社鳥居や峠での石積みと同じ意味合いで行われており、「ああ、やっぱり同じだ」という感慨を抱いた。

同じと言えば、この南山登山口で日本の道祖神に近似するチャンスン（木像）にも出会うことができた。そこには「生命の源泉」と刻銘があり、石仏の宝庫である聖地を守る道祖神らしい役目を律儀に担っていた。



南山登山口に立つチャンスン



仏国寺の賽の河原で石積みをするカップル

「韓国石仏の旅」紀行

上越市 栗 間 啓 志

当会の創立二十五周年を記念し、去る九月二十九日から十月二日までの日程で、十二名の参加者により韓国へ旅立ちました。

旅先の焦点は、高句麗、百濟、新羅の鼎立による三国時代を統一した新羅王国時代の都として千年を超える繁栄が続いた「慶州」で、多くの伝統的文化遺産の宝庫として知られています。特に仏国寺、石窟庵は世界遺産として韓国が誇る国宝遺跡です。



青雲橋・白雲橋（仏国寺）



多宝塔・釈迦塔（仏国寺）



石窟庵 窟院

《石窟庵》 洞窟式の寺院はインドから中国を経て朝鮮に伝えられました。しかし慶州の岩は硬いため掘削ではなく、切削した花崗岩を積み上げて造られた石窟で、千二百年以上経過しています。ドーム型の石窟内は前室、扉道、主室からなり、前室の壁には四天王と仁王像が彫刻されています。湿気対策のため前面よりガラスで仕切られて密室化されているので、宗教性と芸術性の両面で優れた名作とされる秀麗な本尊仏の釈迦如来坐像は、ガラス越しに拝観することになります。



拝洞・石造如来三尊立像（南山）

『**拝洞・石造如来三尊立像**』 慶州南山地区の山麓に散在していた石像を後に安置したもので、中央の本尊仏は阿弥陀如來像、左側は觀世音菩薩像、右側は大勢至菩薩像です。この三尊仏は軀体に比べ、頭部を大きく表現している点や、両脇を穿つている点、また微笑みをたたえている表情など、全体的な像容から朝鮮三国時代末の七世紀の製作と推定されています。

因みに、妙高市関山神社の銅造聖觀音菩薩立像（国重文）も、三国時代の渡来仏と確認されており、郷土の身近にある仏像の

出自が古朝鮮である事に、当時の仏教文化の伝播に改めて感銘します。

その他の訪問先は、紙面の都合により割愛致します。

日本史を遡ると、往時の様々な先進文化は朝鮮半島を経て流入してきた事が定説です。

今回の旅はそのような伝来検証の礎を成すものでしたが、しかしそれらの源流は中國に帰する観点が重要です。その意味に於いて、次に続く「中国石仏の旅」への期待が募つて止みません。

韓国石仏の旅スナップ



慶州・天馬塚の前で（民族衣装で変身の2名と）



南山・石造如来三尊の前で



仏国寺山門前で

三国街道の石仏を訪ねて

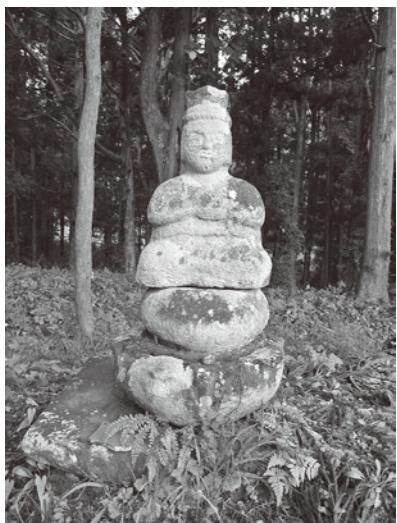
—中越地区見学会報告—

阿賀野市 岩野笙子

平成三十年十月十六日、十七日の二日間、総勢二十七名が参加し、中越地区見学会が開催された。宿は、川端康成ゆかりの「高半ホテル」で、高橋正明氏による企画案内であった。

第一日目 一時三十分、高半ホテルに集合。午後二時、ホテルのマイクロバスで土樽地区を見学する。

瑞祥庵では石川雲蝶の仁王像を見学。本土樽浅間神社では正徳（一七一二）建立の十二山神（木像）や風神・丸石のマリシテンを見学。川端康成の通った清水トンネルの出入り口を見学した帰路、瑞祥庵の寒大



寒大神（瑞祥庵）



小坂百庚申塔

置され庄巻。それにしても、この地区の庚申塔の何と巨大なことか。地域における庚申信仰の深さが窺われる。見学最終地は滝又の寒大神。苔に埋もれ静かに建立された。平成十六年の調査以来の再会だったが、すっかり苔に覆われてしまつたのに驚き、時の経過を痛感した。

第一日目 出発前に、館内の小島丹漾伯の日本画、川端康成が小説「雪国」を執筆したという「かすみの間」、石川雲蝶と技を競った小林源太郎作「三国権現堂扉」の彫刻などを鑑賞したあと、九時にホテルを出発する。この日は三国街道、浅貝地区を見学する。

三国峠の道祖神は悪路のため、道祖神坂の途中まで見学。三俣脇本陣池田屋では、資料館の人解説を聞きながらゆっくりと見学する。



三国峠の双体道祖神

大神調査に来た時、とうとう見つからず、あきらめて帰った「幻の寒大神」だった。高橋氏のおかげで、拝見することができて感激だった。中里の津島午頭天王は、この地区ではテンナリサマと呼称され、天保初期に建立とのこと。石仏には「天行星宿 午頭天王 三王権現」と彫られた文字を読むことができた。小坂百庚申群では百体の庚申塔群の中に、風神・雷神・道祖神が安



十二様（山の神）を見学する会員（芝原）

昼食は「そば求道よらつしやい」で、天然舞茸の天麩羅付きのそば定食。ご主人が山で採取したという立派な舞茸に皆感激する。午後は、八木沢の口止め番所跡・芝原石仏群をまわり、四時三十分宿に到着。無事、見学会は終了した。

この二日間は天氣にも恵まれ、実に内容豊富な有意義な見学会であった。最後に、この見学会を企画された高橋正明氏、篤いおもてなしをしてくださった高半ホテル様二日間、長時間運転してくださった運転手さんに心より感謝申し上げる。

湯沢の不思議な石仏たち

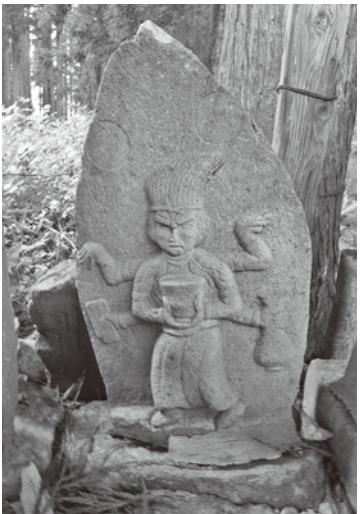
中越見学会で訪れた湯沢の小坂百庚申塔では不思議な石仏たちが私たちを出迎えてくれた。

ひとつは撥を持ち、笛を奏でる六臂の神

像。いまひとつはやはり六臂で正面に鉢を抱える神像。いずれも後背に日・月輪が刻まれる。傍らに風袋を広げた風神がおり、右写真は雷神ではとのするどい意見もあつた。なら左はなに？　にわかに結論のでない石仏たちであつた。



笛を吹く神像



鉢を持つ神像

秦繁治氏が平成三十年五月十六日に、斎藤義信氏が平成三十年九月十五日に淨土へと旅立たれました。

浄土へと旅立たれました。

星野紀子

秦繁治氏、

地道に調査研究された石仏を地元の郷土史に執筆され、その結果を語つてくださる秦氏はとても嬉しそうでした。市町村史編纂に最後まで力を注がれた斎藤氏は、栗島で拓本を採つていらした背中に石仏への愛情を感じました。これが私の中に生きている両氏のお姿です。二十五周年の今年を一緒に祝うことがかなわず、痛恨の極みですが、秦氏と斎藤氏に心よりお礼を申し上げます。

事務局だより



◆石仏フォーラムを開催しました

十一月十一日（日）、新潟県立生涯学習推進センターにて第21回石仏フォーラムが開催され、二十八名の参加でした。以下、概要を報告します。

第一部の公開講演は講師に本井晴信氏（新潟県立文書館・元副館長）をお招きし、「ある老夫婦の巡拝旅行——蒲原郡羽下村長八・りよ夫妻の西国巡りツアーの例——」と題してご講演頂きました。

羽下村の庄屋・伊藤家に伝わる文化十三年の古文書を手がかりに、西国巡礼の帰路



講演する本井晴信氏

に夫・長八が急死し、それに伴う宿場の真摯な配慮・対応について、史料に基づき解説されました。

本井氏は「死者への対応は宿場の品格が表れる」とし、医師の手配から奉行所・実家への連絡、所持品の確認など、江戸後期の旅をめぐる細やかな扶助システムについて言及され、とても興味深い講演でした。

第二部の調査報告は鈴木悟司氏（村上

市）の「墓石から石仏を作る——供養墓の新展開」、佐藤雅子氏（柏崎市）の「スライドで見る韓国石仏の旅」、渡邊三四一氏（柏崎市）の「日本海に漂着した朝鮮のチヤンスンたち」の発表が行われました。

鈴木氏の発表は、関川村の寺で墓石からついて、自ら石工としてこれに携わった経緯や現状を報告され、会員から多くの質問・反響が寄せられました。

佐藤氏は十月実施の「韓国石仏の旅」のエッセンスを数多くのスライドで報告され、これと関連して渡邊氏は日本の道祖神に近似した韓国のチヤンスンについて話題提供されました。

第三部の情報交換では、星野会長より秦繁治氏と斎藤義信氏のご逝去の報告や会員動向等の紹介があり、閉会となりました。

編集後記

◆大楽和正氏が「新潟の石仏」講演

十一月二十日（火）、燕市吉田公民館にて当会会員の大楽和正氏（県立歴史博物館主任研究員）による講演「新潟の石仏」が開催され好評でした。



創立二十五周年を記念しての「韓国石仏の旅」、台風をうまくかわして無事に帰着しました。参加者を代表し栗間氏のレポートを掲載しました。湯沢の見学会も充実した内容で勉強になりました。謎の石仏（神像）についてお分かりの方、ご教示願います。石仏フォーラムを終え、年内の行事は終了です。次なる出会いを楽しみにしています。皆さま、どうぞよいお年を。